



No. 129 2021. 10. 12

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

松が丘プロジェクトが動き始めました



緊急事態宣言で足踏み状態であった松が丘プロジェクトが動き始めました。9月2日には、コミコミスクスク No. 123 号で紹介させていただいたオンライン対話が開かれましたが、10月7日（木）には対面で6年生が実施しようとしている9つの“松が丘プロジェクト”について話し合う、松が丘サミットが開催されました。

今年の6年生は松が丘プロジェクトを企画するにあたり、次のような目的を設定しました。

- ・地域の方と仲良くなるための活動を行い、「人とつながるよさ」を実感する。
- ・松が丘をよりよい街にするために、自分たちができること(松が丘プロジェクト)を考え、実行に移す。
- ・松が丘サミットをとおして、地域の方たちの思いや願いを聞き、共にできることを企画する。

こうした目的を達成するために子どもたちは9つのプロジェクトを考え、7日のサミットではそれぞれのプロジェクトについて地域の方と熟議を行いました。

- 花のガーデニング
- 工作教室
- 折り紙・千羽鶴
- 将棋、百人一首
- ゴミ拾い大会
- ミニゲーム
- Zoom紙芝居
- 運動の会
- ボッチャ、ダーツ



児童会が募集し、生まれた
松が丘キャラクター まつた

これら9つのプロジェクトのねらいや実施方法を説明し、実施に当たっての課題等を地域や保護者の方から出してもらいながらよりよい実施につなげていこうというものです。

短い時間の中でも、地域の方や保護者の方からのシビアな質問に対応する中で、子どもたちの表情がどんどん真剣さをますなど、改めて松が丘サミットの持つ力を実感させられました。この対話の中でも実施するにあたっての解決しなければいけない課題等が見え、第1回プロジェクトまでにどれだけ改善できるか楽しみです。そうしたことがプロジェクト型の単元の持つ子どもたちを成長させる力だと考えます。私が耳にした範囲ですが参加された方からは、

- 「これまでは地域ごとに分かれての対話であったが、今回はポスターセッション的な形で9つのプロジェクトの説明を聞き、対話することができたのがよかった」
- 「全体的に計画の完成度がたかかったように思う」
- 「第1回の実施まで日がなく、周知等の計画の甘さがある」
- 「ボッチャのグループではどうしてボッチャに取り組むのかといったことを子どもたちに聞いてみるとパラリンピックを見て、たくさんの人に体験して知ってもらう機会になるのではと社会的な背景なども含めて考えているんだなとビックリした」
- 「プレゼンで道具としてタブレットを使いこなしているのにびっくりした」

といった感想を聞くことができました。

松が丘小ではこの活動等を含め「ありがとうと言う存在から、ありがとうと言われる存

在へ」という合言葉に1年から6年までを次のようなステージとして活動に浸れるカリキュラムマネジメントにアプローチされています。

- 1年：愛されるステージ
- 2年：気付くステージ
- 3年：環境という視点から学校づくりに参画するステージ
- 4年：福祉という視点で、地域とつながるステージ
- 5年：学校づくりに参画するステージ
- 6年：地域づくりに挑戦するステージ



こうしたステージを意識した活動に浸れるカリキュラムマネジメントでどんな資質・能力が育っていくのかちょっと考えてみました。

考えるにあたり、まず、学習指導要領の前文に戻ってみました。

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

この前文の中にはどのような資質・能力があるのかを考えた時、筑波大学キャリア教育研究室の“教育よもやま話 第52話 新学習指導要領の前文を改めて読む”にたどり着きました。

そこにはこのような資質・能力として書かれていました。

自分のよさや可能性を認識するとともに、(=自己理解・自己管理能力)

あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、(=人間関係形成能力)

多様な人々と協働しながら(=人間関係形成能力)

様々な社会的変化を乗り越え、(=課題対応能力)

豊かな人生を切り拓き、(=キャリアプランニング能力)

持続可能な社会の創り手となることができるようにする(=社会形成能力)

これらはキャリア教育で育成をめざす「基礎的・汎用的能力」から使われている言葉ですが、こうした「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」と整理すると理解しやすいような気がします。こうした非認知能力を育むためには、能力の育成をねらいとして身に付けさせる授業を組むといったイメージではなく、松が丘小が取り組んでいる「ありがとうと言う存在から、ありがとうと言われる存在へ」という合言葉をベースにしたカリキュラムマネジメントの



ように、それぞれのステージを意識した活動に浸るという環境の中で身につけていくのではと考えます。そうした未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力が育つ環境づくりが学校のコミュニティ・スクールへのアプローチだと考えます。松が丘小は今、こうしたカリキュラムマネジメントをとおして子どもも、大人も育つ地域全体での環境づくりにアプローチされているのだと思います。

今年の松が丘プロジェクトはこれまでのプロジェクトとは違い、交流をより意識したものかなと感じます。プロジェクトを深めていくと地域の方の楽しみや学びの場へつながっていく可能性を感じます。松が丘小がこれまで実施してきた「大人も楽しむ学習広場」と「クラブ活動」を融合した新たな学びの場が生まれるのではと妄想が広がります。そうしたことが学習指導要領がいう「社会に開かれた教育課程」なのでは。(文責：北本)